

高级日语系列教材



总主编·王健宜

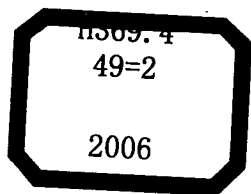
南开大学出版社

刘伟 王健宜·编著

元元

Riben Gudian Wenxue

日本古典文学



高级日语系列教材

日本古典文学

刘 伟 王健宜 编著

南开大学出版社
天 津

图书在版编目(CIP)数据

日本古典文学 / 刘伟, 王健宜编著. —天津: 南开大学出版社, 2006. 8

(高级日语系列教材)

ISBN 7-310-02449-4

I. 日... II. ①刘... ②王... III. ①日语—教材
②古典文学—作品集—日本 IV. H36

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2006)第 020406 号

版权所有 侵权必究

南开大学出版社出版发行

出版人: 肖占鹏

地址: 天津市南开区卫津路 94 号 邮政编码: 300071

营销部电话: (022)23508339 23500755

营销部传真: (022)23508542 邮购部电话: (022)23502200

*

河北省迁安万隆印刷有限责任公司印刷

全国各地新华书店经销

*

2006 年 8 月第 1 版 2006 年 8 月第 1 次印刷

880×1230 毫米 32 开本 10.875 印张 308 千字

定价: 18.00 元

如遇图书印装质量问题, 请与本社营销部联系调换, 电话: (022)23507125

序 言

《高级日语系列教材》是为高等院校日语专业高年级（本科三、四年级以及研究生一、二年级）专门编写的，全套教材由语言基础、文学文化、口笔翻译、国情知识四个部分组成，共 12 种 14 册。它们分别是：《高级日语精读》（上、下）、《高级日语泛读》（上、下）、《高级日语口译》、《高级日语笔译》、《高级日语写作》、《高级日语听力》、《日本文学史》、《日本古典文学》、《日本近代文学》、《日本现代文学》、《日本历史》、《日本文化》。

本套教材中的《高级日语精读》是天津市“十五”规划教材的重点项目，它以全新的体例和结构，展现了教材编写的新思路，反映出日语教学领域以教材引领的教学改革的积极探索。同时，《高级日语精读》以全新的视角和全新的选材，为日语教学本身提供了更为丰富的素材。它的 12 个单元 36 篇文章，从关注中国和日本、关注世界、关注人类的大视野出发，既有物质世界的问题，也有精神世界的问题；既有现实的思考，也有未来的展望。每个单元的文章都精挑细选，话题前卫、语言鲜活、视角独特、特色鲜明。《高级日语精读》既是本套教材的标志性成果，也是其他各册教材的编写宗旨。

本套教材的另一个特色是，有些教材是迄今为止国内外首次尝试编写的创新教材。例如，《日本现代文学》，在研究日本近代文学的基础上，勇于探索日本文学领域出现的新情况，着力在第二次世界大战结束、日本战败以来的文学发展过程中梳理出一条清晰的日本文学和社会的脉络，对于我们认识和把握日本文学和社会具有重要意义。

本套教材在体系上的规范也具有独到之处。例如，文学领域由《日本文学史》、《日本古典文学》、《日本近代文学》、《日本现代文学》四册构成，体系清晰、完整，对日语专门人才培养具有指导和规定性的重要意义。又如，《日本古典文学》、《日本近代文学》、《日本现代文学》

均由若干课构成，打破了传统的编写模式，突出了课堂教学的特点，主题突出、目的明确，便于教学活动的开展和检查。

本套教材是南开大学日本语言文学学科三十多年来开展的丰富多彩的教学、科研活动的一个缩影，也是我们理论联系实际，一切从教学出发的一次探索和尝试。由于我们水平有限，教材中一定有很多缺点、谬误，诚恳地希望学界同仁和广大读者给予批评、指正。

主编 王健宜

2005年5月于南开园

本书特色

正如书名显示的那样，本教材是日本古典文学作品的一个精彩缩影。

从所收作品发表时间的角度来看，本书跨越了从日本文学开始萌芽的奈良时代直至近世江户时代的漫长岁月，绵延 1000 多年，力图 为读者展现一幅日本文学发展变化的丰富多彩的历史画卷。

从所收集的作品表现题材角度来看，本书作品包括说话文学、物语文学、随笔文学、日记纪行文学、近代小说、古典戏曲、和歌、俳句等，几乎囊括了日本古典文学所有重要的文学形式，使读者能够细细品味、尽情领略日本文学的绚烂多姿。

从所收集的作品数量与代表性来看，本书介绍的日本文学作品多达近百部，它们代表着日本古典文学史上最精华的部分，对于重点文学中的重点篇章，本书进行了详细的讲解。通过这种形式，读者可以对日本文学的微观世界有一个更加清晰的了解与认识。

本书内容编排的特点主要表现在：

以文学题材为分类依据，设定课堂讲授和课后自学结合为阅读和学习的主要形式，把日本古典文学分为 20 课，每课既有关联，也可独立成篇。

其次，按照上述顺序，对于不同文学题材，首先是整体介绍、然后是重点文学作品简介与重要作品内容介绍，最后是重点篇章导读。

希望本书成为你了解日本古典文学的一个桥梁。

目 录

- 第一課 古典文学の勧め / 1**
1、日本古典文学史の概観 / 1
2、日本古典文学の読み方 / 11
3、問題 / 13
- 第二課 説話文学の世界 / 14**
1、説話文学の概観 / 14
2、代表作品の紹介 / 14
3、重点作品の粗筋 / 17
4、問題 / 28
- 第三課 説話文学を読む（一） / 29**
1、「児のそら寝」 / 29
2、「安養の尼の小袖」 / 31
3、「信濃守藤原陳忠」 / 32
4、問題 / 40
- 第四課 説話文学を読む（二） / 41**
1、「絵師の執念」 / 41
2、「ませの白菊」 / 43
3、「偷盗の心」 / 46
4、問題 / 48
- 第五課 物語文学の世界 / 49**
1、物語文学の概観 / 49
2、代表作品の紹介 / 50
3、重点作品の粗筋 / 53
4、問題 / 78

第六課 物語文学を読む（一） / 79

- 1、「かぐや姫の生い立ち」 / 79
- 2、「初冠」 / 83
- 3、「東下り」 / 85
- 4、問題 / 89

第七課 物語文学を読む（二） / 90

- 1、「桐壺」 / 90
- 2、「祇園精舎」 / 94
- 3、「木曾の最期」 / 97
- 4、問題 / 106

第八課 随筆文学の世界 / 107

- 1、随筆文学の概観 / 107
- 2、代表作品の紹介 / 107
- 3、重点作品の粗筋 / 109
- 4、問題 / 117

第九課 随筆文学を読む（一） / 118

- 1、「春はあけぼの」 / 118
- 2、「すさまじきもの」 / 121
- 3、「ゆく川の流れ」 / 125
- 4、問題 / 127

第十課 随筆文学を読む（二） / 128

- 1、「よしなしごと」 / 128
- 2、「ある人、弓射ることを習ふ」 / 131
- 3、「花は盛りに、月はくまなき」 / 133
- 4、問題 / 139

第十一課 日記紀行文学の世界 / 140

- 1、日記紀行文学の概観 / 140
- 2、代表作品の紹介 / 140
- 3、重点作品の粗筋 / 142
- 4、問題 / 156

- 第十二課 日記紀行文学を読む（一） / 157**
1、「惜別の門出」 / 157
2、「少女の夢」 / 161
3、「かくありし時」 / 165
4、問題 / 168
- 第十三課 日記紀行文学を読む（二） / 169**
1、「旅へのいざない」 / 169
2、「造化の妙」 / 173
3、「はかなき人の世」 / 177
4、問題 / 179
- 第十四課 近世小説の世界 / 181**
1、近世小説の概観と流れ / 181
2、主要文学ジャンルの代表作品 / 186
3、重点作品の粗筋 / 198
4、問題 / 211
- 第十五課 近世小説を読む / 212**
1、「因果の関守」 / 212
2、「老女のかくれ家」 / 216
3、「鼠の文使ひ」 / 223
4、問題 / 230
- 第十六課 古典演劇の世界 / 231**
1、古典演劇の概観と流れ / 231
2、主要文学ジャンルの代表作品 / 244
3、重点作品の粗筋 / 249
4、問題 / 258
- 第十七課 古典演劇を読む / 259**
1、「観音廻り」 / 259
2、「徳兵衛・おはつ道行」 / 265
3、「嘉肴有」 / 271
4、問題 / 278

第十八課 和歌の世界 / 279

- 1、和歌の概観と代表作品の紹介 / 279
- 2、『万葉集』の名歌 / 281
- 3、『古今和歌集』の名歌 / 286
- 4、『新古今和歌集』の名歌 / 289
- 5、問題 / 294

第十九課 俳句の世界 / 295

- 1、俳句の概観と代表作品の紹介 / 295
- 2、松尾芭蕉の名句 / 299
- 3、蕪村・一茶の名句 / 304
- 4、問題 / 308

第二十課 (付録) 日本古文の基本構文 / 309

- 1、用言に関して / 309
- 2、係り結びに関して / 312
- 3、否定表現 / 314
- 4、禁止表現 / 316
- 5、希望表現 / 317
- 6、疑問表現 / 318
- 7、過去 (回想)・完了・存続 / 319
- 8、推量・意志 / 321
- 9、強意 / 323
- 10、感動・詠嘆 / 323
- 11、接続に関して / 325
- 12、敬語 / 327

付属練習の解答 / 329

第一課 古典文学の勧め

1、日本古典文学史の概観

上代

文学は、文字によって記載されるようになる以前に口承の時代が長く続き、その上限は相当さかのぼり、明らかにすることは困難である。

口承文学が文字と出会って記載され定着固定するようになったことは、集団的民族的性格を持った文学から、個性的な性格の文学への変化となって表われた。下限を平安京遷都（794年）におく上代文学は、まさに口承文学から記載文学への両時代にわたるといふ点、文学ジャンルはわずかに歌謡・祝詞・説話の形態がみられる程度で、他の時代のようにはっきりした区別がなかった未分化の状態という点に、その文学的意義があるといえる。

大和朝廷を中心として全氏族が統一されると、今まで個々に伝えられていた神話、伝説、説話などが、国家権威の目覚めとともにだんだん皇室の伝承を中心として統一されていった。史書というよりも文学として価値の高い「古事記」（712年）である。天武天皇が稗田阿礼（ひえだのあれ）に唱習させたのを太安万侶（おおのやすまろ）が撰録し、紀伝体の形式で編纂されたものである。三巻あって、上巻は神武天皇から推古天皇までを記している。文章は漢文体に国語の語順による書き方、及び、漢字の字音を使って一字一音史記に国語を表す書き方を交えてなるべくもとの国語のまま伝えようと苦心を払っている。八年後の720年にいわゆる六国史（りくこくし）の初めである「日本書紀」

が編纂された。古事記と同じく天武天皇が、帝紀及び上古の諸事を記させたが、その後舎人親王（とねりしんおう）によって編集されたものである。三十巻あって、巻一、二は神代、三巻以後は神武天皇から持統天皇の時代までのことを書いている。文章は歌詞や特殊な古詞を除いて、大体純粹の漢文体で書かれてある。これは対外的国史として編集されたためである。「古事記」が伝說的、文学的であるのに対して、「日本書紀」は歴史として史実を重んじた点が著しく異なっている。「日本書紀」より平安初期までに漢文体の書が六種編まれた。「続日本紀（しよくにほんき）」「日本後紀（にほんこうき）」「続日本後紀」「文徳実録（もんたくじつろく）」「三大実録（さんだいじつろく）」を六国史という。この両書が宮廷内で編纂されたのに対して、古事記のできた翌年、諸国に命じて、その国の地誌や伝承などをまとめさせ、できあがったものが諸国の「風土記」である。多くは滅んで現存するものは、出雲、播磨、常陸、肥前、豊後の五カ国と、その他諸書に引用された部分的なものが伝わっているにすぎない。

「古事記」「日本書紀」に収められた約百九十首の古代歌謡「記紀歌謡」を母胎として生じたものが和歌であり、当代の和歌を集大成したのが「万葉集」である。八世紀後半に成立した現存する最古の歌集で、撰者は大伴家持が中心と考えられている。二十巻から成り、約四千五百首の歌を収める。その歌は内容上、雑歌、相聞、挽歌に大別される。歌体では短歌（四千百余首）、長歌（二百六十余首）、旋頭歌（せどうか）（六十余首）、仏足石歌（ぶつそくせきのうた）がある。作者は天皇貴族から農民賤民に至るまであらゆる階層にわたり歌風は概して素朴で写実的といえる。代表歌人としては、初期の女流歌人額田王（ぬかたのおほきみ）、歌聖と称せられる抒情歌人柿本人麻呂（かきのもとのひとまる）、叙景歌人山部赤人（やまべのあかひと）、人生歌人山上憶良（やまのうへのおくら）、伝説歌人高橋虫麻呂（たかはしのむしまろ）、編者に擬せられている近代的歌人大伴家持（おほどものやかもち）らが挙げられる。また、民衆の歌として東国の民謡的な東歌、九州防備のため東国から徴発された人々による防人歌（さきもりのうた）など

がある。

その他、わが国最古の漢詩集「懷風藻」(751年)がある。また、最初の歌論書である「歌経標式」(772年)、氏族関係として、その氏の由来伝承を記して朝廷に奉った「高橋氏文」(789年)、「古語拾遺」(斎部広成撰 807年)がある。これらの他に、神に対する祈願祝福の詞章である「祝詞(のりと)」、臣下に対する天皇の「みことのり」で和文体の「宣命(せんみやう)」がある。

中古

平安京遷都(794年)から、鎌倉幕府の開設(1192年)までの約四百年間の文学を中古文学とよんでいる。前期は律令体制の衰退、崩壊。藤原氏一門が政権を掌握し、摂関政治は道長の時代に至って頂点にいたる。後期には武士階級が勢力を強めてきて、やがて院政期、源平の戦い、そして中世へと移っていく。

漢字は真名といわれ、「女手(をんなで)」と呼ばれた仮名とは違って、近世まで公式の文字として重んじられ、特に仮名が未発達な平安時代初期までは、文字といえば漢字をさした。この時期810年から820年代にかけて相次いで三つの勅撰漢詩文集「凌雲集」、「文華秀麗集」、「経国集」が出たことでも、720年「日本書紀」に始まり901年「三代実録」までに編まれた六編の正史「六国史」が撰文によって書かれたことでも分かる。また、個人でも菅原道真(すがはらのみちざね)の「管家文草」(900年)、藤原明衡の「本朝文粹」(1060年前後)、詩論叢に空海の「性霊集」(835年)などが見られ、さらに紫式部や清少納言と同時代の藤原公任の「和漢朗詠集」(1013年)は、中国や日本の、当時有名な漢詩文や和歌を集めたものである。

一方、894年には、遣唐使が廃止され、国風文化の高まりは平仮名の発明も手伝って、十世紀初頭に最初の勅撰和歌集「古今和歌集」を生み出した。和歌が往復書簡に用いられるなど日常化し、長歌が廃れて、専ら短歌のみが作られ、歌合わせのような和歌行事をも流行させた。和歌のこのような日常化・遊技化は、前代の素朴さを喪失させ、技巧

的・理知的な要素が強まっていった。この時代に活躍した歌人で、在原業平（ありはらのなりひら）、遍昭、小野小町、文屋康秀、喜撰、大伴黒主を総称して「六歌仙（ろっかせん）」と呼ぶ。平安時代の終わり、そして中世に入ると、技巧を超越し、奥深い情趣を求めようになり、七番目の勅撰和歌集「千載和歌集」（1187年）の編者である藤原俊成は歌の理念を「幽玄」というで表し、八番目の勅撰和歌「新古今和歌集」（1205年）の編者の一人、藤原定家は、これを発展させ「有心」という理念をうちたてた。また、仏教の讃歌「和讃」から起こって鎌倉時代に全盛を迎えた今様（普遍七五調四句形式の歌謡）を中心とした当時の歌謡を、平安末期に後白河法王が集めて作った「梁塵秘抄」（1172以降）が注目される。

平安時代の文学の特色は、漢文学が隆盛した前期、仮名の発明により和歌や散文が発達し、特に女性（女房）が活躍した中期、さらに歴史物語や説話を生み出した後期とに分けられる。散文の流れを見ると、まず伝奇物語と呼ばれる「竹取物語」（900年頃までに）、在原業平をモデルにした歌物語である「伊勢物語」（900年代初頭）や「大和物語」（952年）が作られている。やがて、この二つの流れを統一し、さらに写実的要素を加味して誕生したのが大作「源氏物語」（1000年代初頭）である。五十四帖から成り、初めの四十一帖に光源氏の生涯、続く三帖に源氏の死後と薫の生い立ち、最後の十帖に薫の半生が描かれている。その十帖は、舞台も宇治に移るので、「宇治十帖」と呼ばれる。その後、平安末期にかけてさまざまな物語が作られたが特に精彩を放つものはなかった。「狭衣物語」（1080年頃）「夜の寝覚」（十一世紀後半）「浜松中納言物語」（十一世紀後半）などはそれぞれ特色はあるものの、いずれも「源氏物語」の模倣の域を脱していない。「とりかへばや物語」は、末期的特徴の頹廢的傾向が強く見られる。そんな中で新しい傾向のものとして、短編集「堤中納言物語」があり、新鮮な発想が見られる。

一方、平仮名の発達や摂関政治による後官文化の開花は、随筆文学の傑作「枕草子」（1000年初頭）や女流日記文学を生んだ。仮名文の日

記の最初の作品と言われるのは、紀貫之によって書かれた「土佐日記」(935年)である。感情を表出するためには、話し言葉で、そしてその為には表音文字である平仮名で書く必要があったのである。続いて、関白藤原兼家との愛と苦悩を自叙伝風に記した「蜻蛉日記」(十世紀末)、浪漫的な文学少女の時代から晩年までを回想した「更級日記」(1060年頃)などが書かれた。

平安後期になると、新たに歴史物語が誕生した。編年体で記された「栄華物語」(十一世紀)がその領域を開いた。そのあとの「大鏡」(1100年前後)は紀伝体がもちいられ、単なる栄光栄華の讚美に終わらず、鋭い批判精神が込められている点に価値がある。これにつぐ「今鏡」と、中世の「水鏡」「増鏡」とを合わせて「四鏡(しきょう)」という。説話集としては、三十一巻からなる「今昔物語集」(十一世紀~十二世紀初)が生れ、中世への過渡的傾向を示した。説話は古く「古事記」「日本書紀」「風土記」などにも見られるが、一般に説話の祖とされるのは、平安初頭に薬師寺の僧景戒が編んだ「日本霊異記」(822年頃)である。

中世

鎌倉幕府の開設より江戸開幕の以前(1600年頃)までの約四百年を文学史では中世とするのが一般的である。

鎌倉時代初期の四〇余年は、前代にひき続いて和歌が盛んで、「千五百番歌合」など大規模な「歌合」も行われ、第八勅撰集の「新古今和歌集」が撰出された。歌風は幽玄、有心を基調として、余韻余情を重んずる象徴風の歌風が完成された。藤原定家は撰者の一人で、漢文日記「明月記」(1235年)、歌論「近代秀歌」(1209年頃)、「詠歌大概」(1223年頃)、「毎月抄」(1219年)、家集「拾遺愚草」(1216年成り、1233年増補)などの優れた業績を残した。「新古今和歌集」(1205年)の代表的歌人は、定家のほか西行、慈円、藤原良経、藤原俊成、式子内親王、藤原家隆、寂蓮、後鳥羽上皇などがいる。また、京文化にあこがれた鎌倉第三代将軍源実朝は、万葉調の力強い表現で対象を詠じた家集「金槐和歌集」(1213年頃)を残している。

「新古今和歌集」以後、歌壇活動は低下し、定家の撰んだ「新勅撰和歌集」(1224年)は平明枯淡の趣に移っている。また定家から為家に継がれた歌の家も、為家の死後はその次の世代から三家(二条家、京極家、冷泉家)に分れて対立した。勅撰集は「新勅撰集」以後、室町時代初期の「新続古今和歌集」(1439年)まで十三集を数え、これを「十三代集」という。歌論には、前記定家の作品のほか、鴨長明の「無名抄」などがある。

鎌倉期から和歌の余技として愛好された連歌は、南北朝以後、二条良基により文芸として大成された。最初の連歌撰集「菟玖波集」(1356年)は、救済の協力を得て良基が編纂した。室町期には宗祇、心敬などが活躍し、続く宗祇は、「水無瀬三吟百韻」(1488年)に関係し、「新撰菟玖波集」(1495年)を撰んだ。俳諧の連歌は連歌の制約から脱した気楽な余興として流行し、山崎宗鑑の「新撰犬筑波集」(1523～1539年の間)、荒木田守武の「守武千句」などが編纂された。

物語形態では擬古物語に代わって、動乱の時代を反映して軍記物語・歴史物語が作られるようになった。保元の乱・平治の乱に取材した「保元物語」「平治物語」(1220～1250年の間)、仏教的無常観を基調として典型的な和漢混淆文の「平家物語」(鎌倉前期)、その異本の一つとみられる「源平盛衰記」、南北朝の争乱を題材とした「太平記」(1371年頃)、その後のものでは「義経記」(室町前期)「曾我物語」などがよく知られている。「平家物語」「太平記」に代表される軍記物語の確立は、同時にそれらが語り物として享受されたことが注目される。歴史物語は、前代に続き「水鏡」(平安末期～鎌倉初期)「増鏡」(南北朝期)が作られた。また史論が書かれ、慈円の「愚管抄」(1220年)、北畠親房の「神皇正統記」(1339年)などがある。

鎌倉時代になると、文化の担い手が庶民と接触の多い僧侶や隠者らの知識人になったことや、読書層が一般庶民に広がったことから、説話文学は大いに流行した。世俗説話としては、「今昔物語集」の正統を継ぐ「宇治拾遺物語」(1210年代)が叙述にすぐれているほか、年少者の修養のために十箇条の徳目を立てて例話を集めた「十訓抄」(1252

年)、橘成季の編んだ「古今著聞集」(1254年)、仏教説話として僧無住の「沙石集」(1283年)、鴨長明の「発心集」(1216年までに)などがある。また、擬古物語の流れを汲んだ短編の物語はその読者層の変化に伴って内容表現が平易通俗かつ教訓的なものとなり、数多く作られ広く愛読された。これを御伽草子とよぶ。

日記・紀行文学では、阿仏尼の「十六夜日記」(1280年頃)が紀行的日記の典型であり、他に「海道記」(鎌倉前期)「東関紀行」(鎌倉中期)「とはずがたり」(1306～1313年)などがある。女房日記には「弁内侍日記」(1252年)「中務内侍日記」(鎌倉後期)などが、日記的家集として「建礼門院右京大夫集」(1229～1233年頃)が挙げられる。

中世に新興仏教の発展にともない仏教思想が広く浸透し、「平家物語」のような語り物をはじめ、和歌・連歌・説話などあらゆる文学ジャンルに影響を及ぼした。特に隠者による随筆と僧侶による法語の類に、中世文学の精神を如実に見ることができる。随筆では代表するものとして鴨長明の「方丈記」(1212年)、兼好法師の「徒然草」(1324～1331年の間)が挙げられる。法然・親鸞・日蓮らは法語・遺文に名文をのこしている。また室町期の五山の禅僧たちによる「五山文学」はこの時代の文学として特色を持ち、漢詩文の研究や詩作を支えただけでなく、江戸時代の儒教勃興の基となった。

前代より民衆芸能が各地で行われてきたが、猿楽が田楽などの諸芸能を取り込んで演劇として急速に発達し、室町時代初期、観阿弥・世阿弥の親子が能楽として大成した。その詞章を謡曲(謡)という。歌舞を中心とする能に対して、同じく猿楽を起源と考えられる狂言は即興的な科白(せりふ)劇として発達し、能とあわせて上演された。世阿弥は多くの「風姿花伝」(1400～1402年頃)などの能楽論を書き残している。また能よりやや遅れて室町後期には幸若舞が成立した。

中世の歌謡としては、前代に続いて今様が行われると同時にもっとテンポの速い宴曲、新仏教の民衆への教化を目的とした和讃が盛んであった。庶民的な小歌も流行し、「閑吟集」(1518年)が編まれ、近世歌謡へと発展していく基礎となった。